都留文科大学研究紀要　第89集（2019年３月）
The Tsuru University Review, No.89（March, 2019）

内村鑑三　闘いの軌跡㈢

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzō (Part 3)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第三章　アメリカ留学

一　結婚と離婚

一八八二（明治一五）年一月八日、日曜日。札幌教会の献堂式が午後二時から行われた。内村鑑三はこの日「帆立貝とキリスト教との関係について」という奇抜な題名をつけた講演をした。鑑三の回想記とも言える「余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より」[1]では、前年十一月十二日の札幌基督教青年会の開会式で、このタイトルの演説をしたように記すが、鈴木範久の指摘するように、[2]鑑三の記憶違いで、正しくは、札幌教会献堂式の日のことである。鑑三の右の回想記には、この演説の趣旨は、「地質学と創世記とを調和させようというのが私のねらい」とある。また、語を継いで「当時すでに世の注目をあびはじめていたこの無神論的進化論に対して一撃を加える必要を認めたのである。この講演は風変わりだったので、青年たちは傾聴してくれた」とも書いている。

この年二月八日、開拓使が廃止され、鑑三は札幌県所属の御用掛となる。この頃の鑑三は、給与を伴う仕事と教会の仕事とのふたつに全力で当たっていた。給与を伴う仕事はもっぱら漁業調査にあった。それは水産学研究の基礎調査といえるものである。以後彼は雑誌に、次々と論文を発表する。「千歳川鮭魚減少の源因」（『大日本水産会報告』１号、一八八二・三）、「北海道鱈漁業の景況」（『大日本水産会報告』４号、一八八二・六）、「石狩川鮭魚減少ノ源因」（大日本水産会報告』26号、「いずれも『内村鑑三全集１』収録）が相当する。科学的な実態調査に基づいて、魚の減少について考察し、その対応策を提言したものである。

自然保護と漁業との関係は、二十一世紀のこんにち、より大きな問題となっている。鮭や鱈の減少は自然破壊や乱獲にあることを、十九世紀後半に科学的調査に基づいて、鑑三は見抜くことになる。内村鑑三の先見性が早くも現れた論文群がここに残された。彼は鮭や鱈の保護を訴えると同時に、人口孵化による繁殖を提言しているのである。「札幌県鮑魚蕃殖取調復命書並ニ潜水機使用規則見込上申」（一八八二・一〇推定、『内村鑑三全集1』収録）は、鮑という巻貝の生態を実証的に研究したものであり、鮑は一定の大きさに達した時、はじめて卵子が成熟することを説く。そして潜水機の使用を禁止し、小さな鮑は海に返して、繁殖地を定めて保護するよう提言している。これは当時札幌県知事となっていた調所広丈に提出されたものである。

鑑三は札幌県御用係の仕事に熱中するが、他方、役人としての仕事に限界を感じはじめていた。この年（一八八二）六月十五日付で、札幌から東京の宮部金吾に宛てた英文書簡には、自分が官吏の仕事に向かないこと、無能な上司に我慢がならないことを言い、「偽りのない学問を学びたいか、それなら札幌を去れ！　キリストを広めたいか、それなら役人をやめよ！」（『内村鑑三日録1』の鈴木範久の訳による）と書く。自分を育ててくれた札幌への訣別が、兆しはじめたことを伺わせる文面だ。前章で述べたように、札幌の彼らの教会白官邸の借金は、一八八二（明治一五）年十二月二十八日に全額返済されている。翌十二月二十九日、鑑三ら東京在住の札幌教会会員は宮部金吾宅に集合し、浅草の梅屋で教会独立の祝いをする。

年の明けた一八八三（明治一六）年の初め頃から、鑑三は札幌県の役人の辞任を真剣に考えはじめていた。彼は役人生活に我慢が出来なくなっていたのである。役人生活を辞めることは、三十円の給与を擲つことであり、札幌を去ることを意味した。札幌には弟達三郎が学んでいた。達三郎は後年の英文学研究の業績からしても、学問的には優れていたようであるが、独善的で協調性を欠くなどの問題があった。鑑三にはそれが気がかりであった。札幌にいるなら何とか相談にも乗れるが、役所をやめ、札幌を去るとなると、それもかなわない。彼は胃に痛みを感じるほど、悩みに悩んだ。そして決断した。

一八八三（明治一六）年四月二十二日付で、内村鑑三は札幌県令調所広丈宛に、辞職願を出す。官費生だった鑑三は、卒業後五年間の開拓使勤務が義務づけられていた。それにもかかわらず、鑑三は診断書を添えての辞職願を提出したのである。『内村鑑三全集1』の「解題」には、この間の事情が詳しく述べられている。辞職の正式受理は、この年六月三日であった。

鑑三はその間の五月八日から十二日まで五日間にわたって、東京で開催された第三回全国基督信徒大親睦会に札幌教会代表として参加している。「余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より」には、この大会のことがかなり詳しく述べられ、そこにリバイバル・ムードがみなぎっていたと書いている。大会は鑑三にとって記念すべきものとなった。会場は東京築地の新栄会堂・浅草会堂・井生村楼・久松座などで開かれ、盛会だった。新栄会堂は長老派の教会である。鑑三は二日目の五月九日、井生村楼で「空ノ鳥ト野ノ百合花」と題した演説をし、内容の新しさと明快な論理の展開で注目された。それは『六合雑誌』（一八八三・六）に載った。今は『内村鑑三全集1』で読むことができるので、詳しい紹介は省く。

内村鑑三が全国のキリスト者に知られるようになるのは、この演説以後のことのようだ。後年名を成す日本のキリスト教界の主要人物押川方義・小崎弘道・海老名弾正・植村正久・金森通倫・横井時雄らは鑑三のこの演説を聴いていたからある。また、鑑三が同志社を創設した新島襄と知り合いになり、以後、多くの影響を蒙るようになるのも、新島が当日の鑑三の演説を聴いており、感動したのにはじまる。鑑三はそれなりの準備をして、多少彼なりの演技をも交えて話をしたのであろう。鑑三には強い信仰とそれを現す巧みな話術があった。また、江戸・東京生まれの彼は、いま言う標準語を無理なく使えた。しかも彼の背丈は高く、その風貌は、若くして老成の趣があり、信頼を寄せるに十分なものがあった。それが全国から集った、教職や信徒を捉えたのである。

内村鑑三が札幌県を正式に依願免官となったのは、前述のように、この年六月三日のことである。札幌に戻る必要もなくなった彼は、病気療養をかねて信徒大会で知り合った農学者津田仙とともに六月七日熱海に行き、富士屋に泊まる。津田仙は一八三七（天保八）年八月六日生まれなので、鑑三より二十四歳ほども年上にあたる。佐倉藩士の子で、学農社の創立者である。彼は新島襄・中村正直と共に、当時〈日本キリスト教界の三傑〉とうたわれた人物である。その娘の一人に後に津田英学塾を開き、女子の専門教育に力を尽くした津田梅子がいる。鑑三には、人を魅する美質があった。

鑑三がこの先達である津田仙と知り合ったのは、信徒大会の時がはじめてで、鑑三の右の演説「空ノ鳥ト野ノ百合花」の司会をしたのが、津田仙であったのだ。その直後の熱海行きを考えると、知り合った二人が意気投合し、旅を共にしたと思わざるを得ない。鑑三がこの後、津田の経営する学農社に勤めるのも、こうした縁あってのことである。

津田仙の経営した学農社農学校は、当時にあってはユニークな学校で、東京麻布に所在した。一八七五（明治八）年九月の設立で、一時は二〇〇名を越す学生を擁した。が、鑑三が学農社に勤務する一八八三（明治一六）年頃から学生数が急減し、翌年十二月には閉校に到っている。そこで鑑三が勤務したのは、数ヶ月に過ぎなかったことになる。彼は学農社で動物学を担当し、授業は祈りをもってはじめた。学校教師内村鑑三の誕生である。鑑三にはもともと人を惹きつける才能（タレント）があり、教師職は研究職と共に彼の職業としてふさわしいものがあった。しかし、双方共に生涯成就し得なかった。追い追い述べることとなるが、彼は若き日、多くの学校で教師を務めたものの、常に学校側（経営側）と対立し、信念を曲げることのなかったために追われるという悲劇がつきまとった。つまり、制度との対立が、彼には生涯つきまとったのである。それでも教師職は、当時の官吏などにくらべるとはるかにましだった。

彼が津田仙の経営する学農社農学校に教師として就職したのは、札幌県官吏を依願免官となり、東京で生活をはじめるようになったすぐ後のことである。彼には実生活上の問題があった。収入をいかにして得るかだ。父宜之は事業に失敗し、収入がなかった。しかも、すでに隠居の身で、家督は鑑三に相続されていた。鑑三には家族（両親・祖母・弟三人、妹一人）七人を養う義務もあった。すぐ下の弟達三郎は、鑑三の勧めもあって札幌農学校に入り、何とか自活の道を歩んでいたものの、他の六人の生活は、彼の双肩にあった。

学農社農学校に就職した頃、鑑三は群馬県の安中教会で、浅田タ

ケという女性と知り合う。群馬県南西部の安中は、第二次世界大戦後、周辺町村と合併、市に昇格するが、当時は中山道沿いの村であった。安中は新島襄の両親の出身地でもある。当地の教会は新島をはじめとする同志社関係者によって創設され、当時は海老名弾正が牧師をしていた。鑑三の安中教会の最初の訪問は、一八八三（明治一六）年八月十二日の日曜日で、健康回復を試みて伊香保温泉に静養のため出かけた途次でのことである。なぜ安中かについては、鈴木範久に「内村の安中訪問は、五月に開かれた全国基督信徒大親睦会が影響している」[3]との見解があることを記しておこう。鈴木の調査では、鑑三とタケとの出会いは、最初の安中教会訪問の際であったという。[4]

ついでながら記しておくと、安中教会はこの後、柏木義円によって大きく育つ。柏木は新潟県の与板（現、長岡市の一部）の真宗大谷派西光寺の住職の家に生まれる。東京師範学校を卒業し、群馬県の小学校教員として在職中、安中教会で海老名弾正の影響を受けて受洗、その後新島襄の同志社に学び、母教会安中教会の牧師となる。柏木は一八九八（明治三一）年に『上毛教界月報』を創刊し、牧師を務めながら一九三五（昭和一〇）年に引退するまでの、三八年間に四五九号を発行した。取り上げたテーマは、足尾鉱毒事件、廃娼運動、未解放部落問題、朝鮮人虐殺問題など広範囲にわたり、地域伝道と政治・社会批判運動を活発に展開することとなる。なお、柏木義円に関しては、伊谷隆一『非戦の思想―土着キリスト者・柏木義円』（紀伊國屋書店、一九六七・五）が詳しい。

鑑三が結婚する相手の女性淺田タケは、この安中教会の会員であった。彼女は一八六一（万延二）年三月十一日の生まれで、鑑三とは同年ながら十二日早い。一八七八（明治一一）年三月、安中教会で新島襄から受洗している。その後、同志社女学校に入学、さらに横浜の共立女学校にも学んだ。英語を多少解した教養豊かな女性であった。

この頃、鑑三は友人・知人に英文の手紙を書くことがしばしばあった。四年間寝食を共にした宮部金吾や太田（新渡戸）稲造らには、連日のように英文書簡を寄せている。電話や、ましてインターネットによるEメールなどの普及していなかった時代ゆえ、通信手段は主に手紙であった。英文で記したのは、学校を卒業し、英語を使うことがとかく少なくなる中にあって、忘れないための措置でもあったのだろう。同年十月三十日付太田稲造宛英文書簡には、淺田タケとの結婚問題で、両親との意見の食い違いで悩む鑑三の姿が垣間見られる。また、十二月二十五日付宮部金吾宛英文書簡では、教養のある頭の切れる女性として、タケを紹介している。その頃、学農社は閉鎖され、鑑三は一時無職となるものの、すぐ農商務省農務局水産課に勤めることになる。九時出勤、十二時まで海外の漁業を研究、午後は東京大学で魚の研究をするという生活で、まずは恵まれた職場であった。

両親の反対をはじめ、紆余曲折があったものの、鑑三とタケとは一八八四（明治一七）年三月二十八日、夜七時、東京上野の長蛇亭（ちょうじゃてい）で結婚式を挙げた。鑑三に洗礼を授けた宣教師のM・C・ハリスが司式をした。結婚式当夜の様子は、すでに小原信（おはらしん）の『内村鑑三の生涯　日本的キリスト教の創造』や鈴木範久の『内村鑑三日録１　1861～1888　青年の旅』が紹介しているように、招待客の一人であったクララ・ホイットニー（Clara A.N.Whitney）という女性の『クララの明治日記』[5]に詳しく書きとどめられていた。クララは鑑三が当時

生理学を学んでいたウィリス・ホイットニー（Willis Norton Whitney）の妹であり、その関係での招待であった。ついでに記すなら、クララは幕末・明治の政治家勝海舟の三男梅太郎の妻で、海舟の嫁ということになる。『クララの明治日記』における鑑三と淺田タケとの結婚式の叙述について鈴木範久は、「日本人の結婚式というので興味深く観察している」と書く。[6] クララは結婚式と続く披露宴の模様を丁寧に叙述した後、次のような感想を記している。

内村氏はウィリイの親友で、私の知人の中で最も理知的で注目すべき日本の青年の一人である。非常に熱心なクリスチャンであり、同時に聖職者たちの華である。普通のいわゆる宣教師ではないが、常にその身辺に宗教を携行しているとでも言おうか。内村氏は率先して日本人のために尽くした。新婦は、旧姓を淺田といい、横浜の、ミス・ブリテンの生徒で、やはりクリスチャンである。きっと、幸福なクリスチャンの家庭を築くことだろう。

結婚後タケは、鑑三の両親の家で生活を共にする。鑑三は農商務省農務局水産課の仕事で、北海道・秋田・新潟各地に出張し、調査・研究に励むことになる。彼はその成果を、『大日本水産会報告』に発表する。が、出張が多く、家を留守にしがちだったことは、新婚生活に輝（ひび）を生じさせる。

結婚七ヶ月後の一八八四（明治一七）年十月二十七日付宮部金吾宛英文書簡には、そのやり切れない現実が記されている。ここには鈴木範久が「重要な部分を訳して記そう」として掲げた箇所を以下に転載する。[7]

友よ、僕に関する驚くことを、君に打ち明けなければならない。僕は、人間性について多くのことを学んだと書いた。過去八カ月の間、僕は、わが神以外だれもわからぬ、つらい苦しみを味わされた。長期にわたり、その苦しみのもとを探したが、なにも見つからず、責めは僕自身にあると思っていた。ところが最近になり、我が家を長い間わずらわせていた秘密が明らかになったのだ。ああ！ それは、なんと僕を助け、慰め、力を貸してくれる人であると、思い込んでいた女性、彼女が悪の張本人であり、羊の皮を着た狼であるとわかった。兄弟よ、どうか、この知らせを聞いて驚かないでくれ。その事実を調べるために僕は全精力を注ぎ込んだ。そして四、五の証拠により、そのとおりの事情であることが判然とした。実にきつい一撃を浴びた僕の状態を、君は容易に想像できると思う。よき妻を望んだ僕の祈りは、その正反対のかたちで報いられたのだ。父なる神よ、僕は何をしたため、これほどの厳罰を受けるのでしょうか。

再度書くが、これは鑑三の結婚後七ヶ月の時点での手紙である。ここには自身の結婚の失敗だったことをはっきりと告げるものがある。日本語では書けない辛い事実を、鑑三は親友宮部金吾に英文で綴っているのだ。ここには当初よき伴侶とされた妻淺田タケへの失望と、この先にある離婚という現実が示唆されている。結婚八ヶ月後、鑑三は淺田タケとの離婚を決意し、実行する。

内村鑑三は離婚の真の理由を、生涯書き残すことがなかった。それだけに周辺の人々は、憶測するほかなかったのである。そこでさまざまな風評が生まれた。たとえば鳥井足の『評伝・内村鑑三』[8]には、以下のような叙述が認められる。

鑑三は一生の裡に自分の背の高さくらいの著述を書き遺しながら、この事件に関してだけは何一つ書き遺していないので、離婚の理由、取分け離婚に踏み切るまでの心情の機微に関しては、想像を逞しくするよりほかに方法はないのだが、一つだけ半ば公然となっている事件がある。それはタケが他人の胤を宿しながら鑑三の許へ嫁いで来たということであった。文字でこんなふうに綴ってしまえば、この事件もそれほど深刻な響きを残さないかも知れないが、当の被害者である鑑三にとっては、これは大きな衝撃であったに違いない。

鳥井は鑑三の離婚の理由を、「半ば公然となっている事件」があったと言い、「タケが他人の胤を宿しながら鑑三の許へ嫁いで来た」と書くが、その出所は、一つも明らかにしない。

こうした眉唾物の見解がまかり通るのも、内村鑑三という存在の不可思議性にあるのかも知れない。鑑三は潔癖感の強い男である。タケが舅・姑、さらには小姑との生活に疲れ、如何すべきかを夫以外の男である牧師や他の男性教会員に相談することすら「姦淫」と考えるようなところがあった。また、タケは虚栄心が強く、その虚言癖が鑑三とその家族を苦しめたということが、しばしば採り上げられるが、離婚の真実は、こうした日常茶飯の積み重ね、さらには性格の不一致なども考えてよい。タケの立場に立つならば、大家族の内村家に入り、夫の父母、それに夫の弟妹と上手く歩調を合わせて暮らすのは大変だった。まして夫は農相務省の仕事で出張が多く、留守がちである。彼女は途方に暮れ、牧師や信頼できる男性に相談をすることがあったに違いない。

あれこれあったものの、鑑三は聖書に照らして、タケの行動に許し難いものを感じ、それ故の離婚という最終的決心をせざるを得なかったのである。書類上の正式な離婚は、ずっと後の渡米・帰国後の一八八九（明治二二）年五月である。ここではこれ以上の穿鑿は控えたい。それにしても一般に離婚は、マイナス要素として扱われがちである。けれども鑑三の場合、離婚という事件は、「不幸な出来事であったが、鑑三の罪意識と信仰、女性観などに及ぼした影響は大きく、もしそれがなかったとしたら、後年の鑑三は別のものになっただろう[9]」（鈴木範久）とか、「人間鑑三を、ひとまわりもふたまわりも大きくする転機となった[10]」（小原信）と捉えるのが、妥当な見解としたい。

タケとの離婚によって鑑三が受けた打撃は大きかった。彼はなすすべもなく、一時神に棄てられた思いすら抱く。潔癖な彼は、タケが安中の実家に帰ってしまったのを呼び戻すこともなく、離婚の手続きをとることを考える。当時の日本での離婚という現実は、世間からダメ人間、敗残者の烙印を押されるようなものであった。まして、農商務省という公務員の鑑三には、世間の圧力は強かった。彼はすぐさま辞職願を提出、父や友人たちの勧めもあって、イギリスかアメリカへの留学を考える。

留学といえば響きはよいが、内実は日本からの逃亡であった。彼

は一日も早く日本を離れたかった。離婚という体験を忘れたかったのである。農商務省時代には『*Catalogue of Japanese Fishes* 日本魚類目録』（手稿、明治一六～二六年頃とされる。『内村鑑三全集1』収録）のような、水産学上の労作をものしていたものの、留学を期に、鑑三はその道からも離れることになる。

二　養護施設の介護人

一八八四（明治一七）年十一月六日、内村鑑三はアメリカに向かって、シティ・オヴ・トウキョウ（City of Tokyo）号で横浜を出発した。横浜港には父宜之が見送りに来た。父は鑑三の勧めに従い、洗礼を受け、クリスチャンになっており、鑑三の離婚のよき理解者でもあった。父は次のような歌を鑑三に送った。励ましの歌である。

聞きしのみまだ見ぬ国に神しあれば
行けよ　わが子よなにおそるべき
（『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』による）

鑑三は革鞄一つ持って出立した。当時の旅行者の姿は、革鞄に代表された。鞄の中には書物として聖書、ブレースの『慈恵観念発達史』、『太平記』、それに宮部金吾から贈られた『古今集遠眼鏡』の四冊がが収められていた[11]。

離婚後の鑑三は、一日も早く日本を去りたかった。愛する国日本を一時離れることは、どうしても必要だったのである。離婚に関して、魔女裁判のような立場に立たされるのは、いたたまらなかった。むろん経済的にはどう考えても無理との考えは、冷静な彼の頭脳が判断していた。しかし、そうした思いを超えて、彼を海外に赴かせるエネルギーが沸き立っていた。彼は祈りの中で決断する。目的地はイギリスでもアメリカでもよかったが、彼はアメリカ行きを決意した。アメリカまでの費用は、それまでの節約による蓄えと父からの援助によったものの、前途の生活の見通しは立たなかった。彼はすべてを神にゆだね、日本を発ったのである。彼には讃美歌二五八番（現行讃美歌三三七）「わが生けるは　主にこそよれ、／死ぬるもわが益（えき）、また幸（さち）なり」の歌曲が響いていた。

かくて内村鑑三は、富士山に代表される日本を去った。彼は富士への思いを『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』に書きつづる。彼のアメリカ行きは、日本の現実からの逃亡であると同時に、より大きな人間となるための旅であった。それは『旧約聖書』の「創世記」に見られるヤコブの子ヨセフのエジプト行きにもどこか通じていた。

横浜からの同船した日本人で同室となったのは、家永豊吉と小野英二郎であった。家永は『日本キリスト教歴史大事典[12]』によると、一八六二（文久二）年十二月六日、筑後柳川の生まれ。熊本洋学校から新島の同志社に学んだ男で、熊本バンド出身の英才の一人である。英語はよくできたという。徳富猪一郎（蘇峰）と親しく、同志社は中退して上京し、一八八四（明治一七）年渡米、アメリカではオベリン大学、さらにジョンズ・ホプキンズ大学に学んだ。ジョンズ・ホプキンズ大学では、太田（新渡戸）稲造と同期で、共に博士号を得て帰国、慶應義塾大学や東京高等商業学校などで教鞭を執る。のち外務省を経て、アメリカコロンビア大学で日本学の講義を

したという。すると家永豊吉は、早い時期におけるアメリカでの日本紹介の先導者であったことになる。が、その生涯はどちらかというと不遇で、在米中の一九三六（昭和一一）年十二月二十九日、ニューヨーク州の凍結した湖の亀裂に落ちて溺死する。

もう一人の同船者小野英二郎は、これも『日本キリスト教歴史大事典』によると、一八六四（元治一）七月二十六日、家永同様、筑後柳川の生まれ。柳川中学校から同志社に学ぶも、中退し、上京、渡米。家永同様、オベリン大学に入り、のちミシガン大学大学院で学位を得て帰国、郷里柳川の橘蔭学館教員を経て同志社関係の学校（同志社政法学校）の教授となる。その後、日本銀行を経、日本興業銀行の副総裁、そして総裁になるも、在任中の一九二七（昭和二）年十一月二十六日、鑑三に三年ほど先立って永眠。彼は欧米の経済通として知られたという。鑑三は家永より一歳、小野より三歳ほど年長であった。二人ともキリスト者である。鑑三はよき日本人の同船者に恵まれたといえよう。また、鑑三の二人に与えた影響も、さぞ、大きかったものと思われる。なお、小野の長男小野俊一（ロシア文学翻訳家）に、「留学生内村鑑三」（『中央公論』一九五一・二～六）があることを追記しておこう。

一八八四（明治一七）年十一月二十四日、内村鑑三らは早朝、アメリカカリフォルニア州のサンフランシスコに入港する。横浜を出航した後、十八日を費やしての船旅であった。鑑三はアメリカ到着の印象を、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』に次のように記している。

一八八四年十一月二十四日の朝まだき、狂喜した私の眼は初めてキリスト教国のかすかな影をとらえた。私はもう一度、自分の三等船客に下り、そこにひざまずいて祈った。甲板客の興奮に加わるには、この瞬間はあまりにも重大すぎたからである。低い沿岸山脈（コーストレンジ）が次第にはっきりと眼に映ってくるにつれ、自分の夢がついに今実現されたという思いに圧倒されて、感謝の涙がぼろぼろと頬を伝わった。やがて金門湾（ゴールデンゲート）も過ぎる。視界にはいる煙突や帆柱はみな天をさす教会堂の尖塔かと疑われた。われわれ――二十人ばかりの青年の一団――は上陸した。そしてわが国人に対して特別な親切を示すという、あるアイルランド人のホテルへ、馬車で乗りつけた。

同年、十一月二十七日、内村鑑三は家永豊吉・小野英二郎とともにサンフランシスコ湾東岸の工業都市オークランドから大陸横断鉄道に乗って、アメリカの東海岸へと向かう。長い鉄道の旅であった。ユタ・コロラド・アイオア州を経てシカゴに着いたのは、十二月四日の午後二時であった。鑑三の目的地は、M・Cハリス夫人のいるペンシルバニア州のエリーという町である。オベリン大学に入る家永と小野とは、それまでに別れている。

鑑三はハリスとは特別のかかわりがあった。札幌で彼から受洗したばかりか、結婚式では司式もしてもらった仲であった。タケと離婚し、アメリカ行きを決心した時も何かと相談に乗って貰っていた。その縁での夫人のいるエリーという町を最初の目的地としたのである。むろんハリスの指示あってのことである。彼は当初、フィラデルフィアにある名門、ペンシルヴァニア大学医学部を目指していたようだ。頭のどこかに医師になり、社会に貢献したいという考

えがあったのかも知れない。

鑑三はアメリカに到着以来、さまざまな体験を重ねていた。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』には、それらの体験が「キリスト教国の第一印象」のもとに語られている。鑑三の英語の力は、抜群であったとはいえ、はじめての国での生活は、容易ではない。住む家から周辺事情、そして何よりも教会、買い物、さらには学ぶ学校のことなど、親しい知人なしには到底生活できない。それは二十一世紀の今日でも、はじめて外国に住むことになる日本人なら、誰しもが当初感じることなのである。まして同胞の少なかった明治十年代のアメリカのことだ。蓄えのない身での異国での生活を如何すべきか、鑑三の不安はよく分かる。ようやくたどり着いたエリーで、鑑三はハリス夫人に暖かくもてなされた。夫人は、まず、自宅の近くに、一週間二ドルで滞在できる下宿を探してくれた。鑑三の最初の滞在拠点である。彼はここからアメリカでの活動を開始する。

十二月十五日、鑑三は日本で生理学を学んだウィリス・ホイットニー（Willis Norton Whitney）の紹介状ををもち、フィラデルフィアにウィスター・モリス（Wister Morris）を訪ねた。モリスはペンシルバニア鉄道会社などを経営する実業家である。モリスが鑑三にアメリカに行ったら第一にホイットニーを訪ねるよう伝えたのは、その経済界での実力と義侠心とを見込んでのことであった。この初老の人物は、当時の不景気のアメリカにあって、職探しが容易でないことを諄々と説いた。鑑三に「ウィスター、モリス氏に関する余の回顧」[13]という一文がある。

その冒頭で鑑三は、「我儕（われら）日本人として米国費府（フィラデルフィア）に遊ぶ者は独りとしてウィスター、モリス氏の名を知らざる者なく氏の厚遇に与らざる者は殆ど稀なり」と書く。また、「モリス氏夫婦の日本の為に費（ついや）せしは実に二十年以上に達せり」とも言う。鑑三には当初モリスが「冷淡」に見えた。けれども、「氏が余の為に周旋せし事は常に余の知（しら）ざる様に暗に親切を施せり」と回顧するように、鑑三が有為な青年であることを見抜いたモリスは、以後、鑑三に目立たないようにして、何かと金銭的な援助をすることとなる。モリスはホイットニー同様、夫婦共々クエーカー信徒であった。鑑三の生涯に亘るクエーカー派への好意と理解は、モリス夫婦を知って以来のことである。ハリス夫人とモリス夫婦は、鑑三のアメリカ滞在の最初のよき支援者であった。モリス夫人は、クエーカー派の集会で鑑三に演説をさせ、謝金を与えるなど、彼の自尊心を害さないやり方で金銭的援助をした。

内村鑑三がフィラデルフィア近くのミデヤに住むハリス夫人の伯父を訪ね、一泊したのは、モリスを初訪問した日の翌々日、十二月十七日のことである。翌十八日鑑三は、同地のエルウィンにある精神薄弱児の施設（Pennsylvania Training School for Feeble Minded Children）を訪れ、カーリン（Isaac Newton Kerlin）院長に会う。鑑三は日本にいた時から「慈善事業」には関心を持っていた。それ故のFeeble Minded Children施設の訪問であった。面談したカーリンは、優れた人格者であった。鑑三は再度の訪問で、カーリンと相談の上、同施設で、九ヶ月ほど働くことになる。食事付きで月給十六ドルという好待遇であった。これは翌年の大学進学までの時期である。かくて翌一八八五（明治一八）年一月一日から鑑三はこの施設で働くことになった。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記よ

り』には、以下のようにある。

さて私はアメリカに着くと、まもなく、ペンシルヴァニアのある医師に「拾い上げ」られた。最も実行家型の慈善事業家であるこの人は、私の性格をちょっとしらべてから、保護者となることを引き受けてくれた。そして慈善事業の実際について、ごく、低いところから順を追って、いっさいを経験するために、私を彼の「看護人（アッテンダント）」の中に加えた。こうして、私は、帝国政府の官吏から急転して白痴院の一看護人となったのだ。しかし私はそれを転落とは感じなかった。ナザレの大工の子によって、今や全く新しい人生観を与えられていたからである。

エルウィンの知的障害児施設での仕事は、きつかった。しかし、鑑三は、それを神が自分に与えられた試練として受け止め、誠実に仕事にあたった。この年一月十九日付太田（新渡戸）稲造宛書簡には、障害児施設での仕事の詳しい内容が記されている。それによると隔日の夜勤、障害児の歩行訓練やはしご乗り、ダンベル体操によるリハビリなど、介護の実態が見られる。太田は当時、ボルチモアのジョンズ・ホプキンズ大学に学んでいた。

鑑三が知的障害児の教育と格闘していた一八八五（明治一八）年四月十五日、日本の別れた妻タケが、鑑三との子である女児ノブを生む。鑑三は父宜之からタケの妊娠のことを知らされてはいたが、復縁の勧めは断固拒否していた。そのためかノブの誕生は、しばらくは鑑三に伝えられていない。ノブは、タケの兄に子どもがいなかったので、淺田家の養女として育てられた。後日譚となるが、タケはその後再婚し、松岡姓となり、一九一八（大正七）年七月、九州で死去したとされる。

知的障害児施設での仕事はきつかった。しかし、鑑三は離婚という事件を振り払うかのように働く。離婚という苦い体験がなければ、自尊心に富んだ鑑三にとって、障害児介護は長続きのしない仕事であったろう。当初、日本人の鑑三は、ジャップ、ジャップと呼ばれ、さげすまれた。が、彼は気にすることもなく、子どもの相手をし、その尻ぬぐいをし、トイレの掃除までした。時に言うことを聞かない子どもに対しては、鞭を加えることもせず、自らが断食することで応えている。鑑三の回顧録「流竄録」（『国民之友』二三三～二五一号、一八九四・八・二三～一八九五・四・二三）には、その様子が詳しく描かれる。彼は『旧約聖書』の「ヨブ記」に熱心に目を通すことになる。そして慰められる思いを抱く。彼はヨブの苦しみ・悩みを自身のものとするのであった。

こうして仕事にも慣れ出した鑑三は、一八八五（明治一八）年三月二十四日、札幌農学校に大きな足跡を残したウィリアム・スミス・クラークに長文の手紙（英文）を出す。それはいま鈴木範久の労作『内村鑑三日録１ 1861～1888 青年の旅』[15]に、クラークの子孫によって公開された全文が収録されている。鑑三は未知のクラークに、キリスト教に入信したのはあなたのお陰であると記し、札幌教会のことや、今はアメリカにいてエルウィンの施設で働いていることなどを率直に述べている。

鑑三が憧れの人、クラークに初めて会うのは、この年九月八日のことである。半年後の一八八六（明治一九）年三月九日、クラークが五十九歳の若さで死去すると、鑑三は追悼の辞 The Missionary

work of William S.Clark,Ph.D.,L.L.D を書き[16]、アメリカの人々に日本国札幌でのクラークの大きな業績を述べている。クラークは、「札幌の八カ月がハイライトであり、帰国したアメリカは、クラークに好意的ではなかった[17]」とされるが、鑑三にとってのクラークは、青春の永遠の憧れの師であったのだ。

一八八五年の復活祭（イースター）は、四月五日の日曜日が相当した。復活祭は世界の教会歴における移動祝日で、春分後の最初の満月の後の日曜日が相当する。キリストの復活を祝う日である。教会ではいろいろな行事がある。その日鑑三は、当時アメリカの知的障害児教育の権威とされたジェームズ・ビー・リチャーズ（James B. Richards）という人の話を聞く。

リチャーズはエルウィンの施設の開設にも関わった人物であった。鑑三はリチャーズの口を通し、知的障害児の教育は、単なる憐憫や社会的扶助などではなく、それは神の御旨、福音に基づくものであることを知らされる。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』には、リチャーズと彼から受けた影響が、以下のように語られている。復活祭の翌日の記事である。

四月六日　白痴児童の教育にいっそうの喜びと熱意とをおぼえつつある。

この前日、私は自分の生涯で見た最もすばらしい人物の一人に会った。それは故ジェームズ・ビー・リチャーズ氏で、不屈の意志を持つ白痴児童教育家として世界的令名のある人である。親しく氏自身の口から、氏の若い頃の教育上の経験の一部が語られたが、氏はそれによって、神の子らのうちの最も劣等なものにも、「父なる神を教える」ことができるという事実を立証した。氏の話から受けた印象は電撃的で、その影響は永久的であった。この時以後、慈善と教育とは単なる憐憫と実益との事業ではなくなった。二者ともに、高い宗教上の目的を持つもの、――すなわち唯一の善なる神を分かち与える仕事だと考えるようになったのである。白痴院の看護人の職は今や神聖な清浄なものに栄化され、義務のうちに隠されていた奴隷的要素はすべて払い落とされた。教会関係から言えばユニテリヤン（ママ）主義を奉ずるリチャーズ氏ではあるが、私は彼を、かつて自分に送られた最もりっぱな宣教師の一人に数える。その教師としての非凡な天才は言わずもがな、その人と成りと深い同情心とが、正統信仰的の環境と読書とによってつちかわれた私の三位一体論的偏見の多くを取り除いてくれたのである。

復活祭の日のこの出来事は、以後鑑三の仕事を試練に耐える場から福音の喜びを伝える場へと変えることになる。

五日後の四月十日、鑑三はエドワード・サイル（Edward W.Syle）という、かつて開成学校や東京大学で歴史や修身を教えたことのある人物の紹介で、フィラデルフィアで日本事情の講演をし、サイル宅に宿泊している。鑑三はエルウィンの知的障害児施設での仕事で得る給料のほかに、彼を援助する人々の配慮による講演収入で、以後のアメリカ生活を賄ったようである。

同年五月八日、日本で知り合い、互いに好感を持っていた新島襄がフィラデルフィアに到着、二人は久闊を叙することになる。楽しい再会であり、鑑三は日本に帰ったら神のために働くという希望を

述べている。この時、新島襄、満四十二歳、鑑三、二十四歳、二人の年齢差は十八、鑑三は新島襄を先生と呼び、自らを「弟」と称した。この時の二人の交流は、『新島襄全集』[18]にも見ることができる。

この頃、鑑三は『旧約聖書』の「エレミヤ記」（「エレミヤ書」）を熱心に読む。エレミヤは古代イスラエルの預言者である。「エレミヤ記」は、民に神への回心を説いた、救済と預言の書である。鑑三の「余の旧き聖書より」[19]には、「エレミヤ記」を読み終えて、次のような感想を「エレミヤ記」の終わりに日本語で赤インキをもって記したとある。

明治十八年五月廿九日米国エルウィンに於て之を読み終る、我が心思を動かすこと甚だし、一国の興敗、愛国者の困難、一々我が心魂に徹す、願くは将来国のために計るに及んで大に益する所あらんことを。

エレミヤは鑑三の忠実な弟子、矢内原忠雄が「彼（筆者注、エレミヤ）の心臓に脈搏つた血は、今日の我々にさして遠いものではありません」として、その名著『余の尊敬する人物』（岩波新書、一九四〇・五）の巻頭に採り上げ、共感を持って論じた人物であった。鑑三も忠雄も困難な時代と環境の中で、「エレミヤ記」（「エレミヤ書」）に救いを見出していたのである。

鑑三のアメリカ生活は厳しいものがあったが、エルウィンの生活にも慣れるに従い、サポートしてくれる人々にも恵まれて順調に滑り出した。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』には、アメリカ滞在中の彼を理解し、物心両面で援助を惜しまなかった人として、院長のカーリンのことが語られる。鑑三はカーリンを自分自身とのかかわりで、次のように描く。

院長は死の間際まで、私の最も信頼すべき友人であった。年齢、人種、国籍、気質等の点で非常な違いがあったにもかかわらず、彼と私とを結んだ友情は実に永久的なものであった。ニュー・イングランドにおける学校生活のあいだ、親しい友人たちが私の心と頭とについて心配してくれていたときにも、彼は私の胃の腑を思いやり、本格的な食事を十分にとって元気をつけるようにと言って、しばしば実質的な援助を送ってくれた。帰国後の型破りのやり方のため、信仰の兄弟たちにまで、私の心と魂の健康が疑われたときにも、彼は私の誠実と正統主義（オルソドキシー）とを決して疑わず、海のかなたから援助と声援とを送り続けてくれた。まことに彼こそは私に人間性を与えてくれた人である。もしも私が書物と大学と神学校だけでキリスト教を学んだのであったなら、私のキリスト教は、冷たい、堅い、実行性を欠いたものとなっていただろう。いかに多くの方法によって、「大きな霊」がわれらを形造りたもうことか！

カーリンは鑑三を愛し、信頼した。この年六月、カーリンはフィラデルフィアで開かれた全米慈善矯正会議に出席するに際し、鑑三に声をかけ、同行させた。鑑三は大和魂について短い講演をした。続いてワシントンの聾唖大学に招かれていた一行は、鉄道馬車でワシントンに向かう。馬車の中で鑑三は、十歳ほど年長と思われる一人のアメリカ人と知り合いになる。終生の友となるベル（David C.

Bell）である。ベルはアメリカで成功した事業家で、当時はミネアポリスの銀行の頭取であった。ベルについて鑑三は、後年次のように書いている。

（ベルは）ミネアポリスの小き私立銀行の頭取にして久しく彼地のプリマス教会（組合教会）の会計係を勤めた、教師にも非ず神学者にも非ざる彼は最も常識に富みたる熱心なる基督者にして且固き再臨信者である、彼は其時以来深く余を愛し余の帰国せし後も常に書信を絶たない。而して彼は屢々余に贈るにキリスト再臨に関する書を以てしたのである、（「再臨信仰の実験」『聖書之研究』一三二号、一九一九・一・一〇）

初対面で意気投合した二人は、翌朝、ウィラード・ホテルの待合室で様々なことを話し合った後、別れる。アメリカ滞在中、二人は、後日ベルが仕事でボストンに来た時、街路で偶然出会い、握手を交わしたに過ぎない。が、鑑三とベルには以後、太平洋という大きな海を越えた友情が育つ。馬が合ったというのか、人種・年齢・国境を越えた交際が、生涯続くことになる。

ベルの友情から来る励ましと金銭的援助は、鑑三の生涯に大きな意味を持つ。鑑三は帰国後、何か事があるとベルに手紙を送り、その心情を吐露することになる。それらの便りは、ベルによって保管され、後年山本泰次郎によって日本語に翻訳されることになる（『内村鑑三日記書簡全集』5・6、教文館、一九六四・七、一〇ほか）。なお、このワシントン滞在中、鑑三はカーリンに伴われて、クリーブランド大統領に会い、握手をしている。

旅からエルウィンに戻った鑑三は、モリス夫人から大学進学に必要な、年額二〇〇ドルの援助をするとの申し出を受ける。施設での仕事はきつかったが、彼には前途の希望が生じていた。モリス夫婦の勧めは、ペンシルヴァニア大学医学部にあった。ペンシルヴァニア大学は、一七四〇年設立の、フィラデルフィアにある私立大学である。前述したことながら、鑑三はアメリカ到着当初から、この名門校の医学部に学ぶ希望を持っていた。医者になるならば、日本での伝道にも役立つし、第一に貧しい家の弟妹を養うこともできるとの考えが、彼を支配していた。また、彼は帰朝したなら、教会で働くにしても、信者からの献金に頼らず、「独立独歩」で臨むことの必要性を強く感じていたからである。

他方、カーリンはハーヴァード大学を勧めていた。ハーヴァード大学は、一六三六年に創設されたアメリカ最古の大学である。ボストンの近郊ケンブリッジに中核となる学部があり、設立当初は「社会と教会の指導者を育成する」ことにあり、鑑三の目指す道にも合致してた。

ところで、ペンシルヴァニア大学医学部もハーヴァード大学も、調べると高額な授業料がかかることが分かってくる。私学ゆえ、やむを得ない面がそこにはあり、そうかといって、奨学金の見込みも立たなかった。彼はこれ以上モリスの世話になることは出来ないと思った。それに新島 襄に会って、アマースト大学を行きを強く勧められたこともあって、彼は最終的にアマースト行きを決心する。

三　アマースト大学

内村鑑三がアメリカペンシルヴァニア州エルウィンの養護施設の仕事を辞めて、マサチューセッツ州アマーストにあるアマースト大学に、まず選科生（聴講生）として入学するのは、一八八五（明治一八）年九月七日のことである。鑑三満二十四歳の秋であった。

彼は当時ボストンで、蔵原惟郭（くらはらこれひろ）と同宿し、時を待っていた。蔵原は熊本県阿蘇郡黒川村（現、阿蘇市）で、阿蘇神社の直系の子として生まれ、熊本英学校・同志社を経て、鑑三より少し前に、アメリカボストンに留学。次いで一八九〇（明治二三）年に渡英し、帰国後は政治家となった人物である。ちなみに彼の次男は、昭和前期にプロレタリア文学の評論家として活躍した蔵原惟人（これひと）である。惟人の気骨ある文章と、権力に一歩も引かない態度は、父親譲りのものであった。鑑三は蔵原惟郭の野人ぶりを愛した。「旧友蔵原氏を迎ふ」（『基督教新聞』一九九一・一二・一一、『内村鑑三全集1』収録）の一文に、この人物の一側面が伺える。

アマースト大学は、一八二一年、語学者ウェブスター（Noah Webster 辞書の編集で世界的に著名）らによって設立された私立大学である。当初からリベラル・アーツにすぐれた大学として知られていた。南にホリヨーク山脈が望見できる、なだらかな丘の上にあるキャンパスは、美しい自然の中にあり、介護施設での仕事に疲れた鑑三を慰めるものがあった。

後年、第二次世界大戦後のことになるが、鑑三の宗教上の教え子矢内原忠雄が「アマースト・カレッジ訪問記」を『文藝春秋』（一九五一・二、初出タイトルは「ある小さき大学の理想」、のち『銀杏のおちば』収録に際し改題）に書くが、そこには次のように、アマースト大学の創立の精神が語られている。以下のようである。

この閑静なアマーストの村は、つとに文人学者の住むところとなった。中でも、辞書で有名なノア・ウェブスターは一八一二年、五十四歳の時この村に来り、十年間ここに住んだ。ウェブスターはここに住んだ間に、辞書編纂の仕事に精励すると共に、同志と計って一つの私立学校を創設した。これがアマースト・カレジの前身であった。この学校のサウス・カレッジの定礎式に際し、ウェブスターは演説して言った。

「この学校の目的は、人類を無知と堕落から救い上げ、幸福と栄光への道を教えるという大切な仕事に寄与することにある。人類はあまりにも長く人間生活の不幸を増加するところの野蛮な仕事に従事して来た。あまりにも長く彼らの努力と資源は戦争と略奪のために、生命と財産の破壊のために、町々の荒廃のために、同じ人類同胞を奴隷化し堕落させるところの悪魔的な仕事のために使用せられて来た。云々」

彼はまたいった。

「この幼い学校が、ケンブリッジから弘められる誤謬の進展をくい止めることに貢献するだけの大きさに成長することを、われらは望むものである。」

ウェブスターの言葉によって、われわれはアマースト・カレッジ創立の精神を知ることが出来る。それは、第一に、人道

主義的な理想に燃えたものであった。植民時代から英仏戦争、独立戦争を経て、戦争と奴隷制度の害悪を痛感した者が、平和と人道の社会を作るための一助たらしめる自覚を以て、この学校を創立したのである。

第二に、それはハーバード大学並にそれの保護者であるボストンの富裕な商人たちの合理主義的な宗教と、消極的な信仰態度の伝播をくい止めて、コンネクチカット渓谷の住民に正統的信仰と積極的な福音伝道の精神を鼓吹する目的を以て建てられたのである。アマースト・カレッジは創立の当初においては、一般教養のリベラル・カレッジであったと共に特に福音伝道者の養成に重きを置いたのであった。

格調高くうたいあげた、矢内原忠雄の「アマースト・カレッジ訪問記」から、いま少し引用したい。アマースト大学中興の祖、エドワード・ヒッチコックに触れ、鑑三が影響を受けたクラーク、そして札幌農学校とのかかわりに及ぶ箇所である。

ヒッチコックがアマースト・カレッジの学長であった時、ウィリアム・スミス・クラークはその学生であった。ヒッチコックは有名な地質学者であったが、クラークはその奨励の下に自然科学に大なる興味をもち、一八四八年卒業後ドイツに留学し、ゲッチンゲン大学で博士号を得た。クラークはアマーストの卒業生中最初のドイツ留学者であり、彼によってドイツの科学は始めて直接にアマースト・カレッジに紹介されたのである。

クラークはドイツから帰って母校の科学の教授となり、十五箇年在住して最も熱心、且つ有力な教授として活動した。クラーク教授の科学研究室はジョンソン・チャペルの地下室にあり、化学実験の煙は時にチャペルの祈と混じて天に昇ったと伝えられる。

アマーストの村にはアマースト・カレッジの外に、マサチューセッツ州立農科大学がある。（近年工科が増設せられて、私が今年往った時は、なお新しい建物がどんどん建設中であった。）この州立農科大学をアマーストの村に建てさせるために最も骨を折ったのはヒッチコックであったが、その最初の学長に任命された者はクラークであった。クラークはこの新設農科大学の基礎を置いただけでなく、更に一つの新しい農科大学の基礎を置く為めに努力した。しかもそれは米国内の事ではなく、遙かに遠く太平洋を越え、日本の北海道に新設された札幌農学校がそれであった。

鑑三自身はアマースト大学をケムブリッジ（ハーヴァード大学）と比べて、「流竄録[20]」では、次のように描いている。

純粋智識にして若し予の欲する所ならん乎、予は勿論「ケムブリッジ」を撰ぶべきなり、其規模の大にして其機関の整頓せる、其社交的勢力の強大にして其交際界の広闊なる、米国大学中「ケムブリッヂ」の右に出づるものなし、智を慕ふもの、名を好むもの、交を求むるものは「ケムブリッヂ」を撰びて他を省みず、米国青年の華は彼処にあり、富者権者智者才子の集合

所、重に当世人士の眼を注ぐ処なり。

「アマスト」は全く其趣を異にす、地は僻、校は大ならず、其学風は古式を重んじ。突進を忌んで漸進を守る、其地翠巒繞囲の中にあり、南にホリヨークの火山脈巍々として列するあり、東にペラムの一脉蜿々として横たはるあれば、北にトビー「糖塊」の二嶺聳へ、西は河を経てベルクシヤ脈を望む、校は天造の円形劇場の中心にあり、美麗なる自然は其四面を護り、滔々たる濁流社会の中に此一仙郷を擁するが如し、市街雑踏の地を去る事遠く、校は周囲を支配して周囲は校を支配せず、所謂「カレツジタウン」（校村）なるものは其成立を此校の存在に帰し、校風四近を靡かして村落自から君子の風あり、「アマスト」の重んずる所は寧ろ徳にありて智にあらず、主義にありて事業にあらず、鍛錬にありて識量にあらず、人を離れて自然と自然の神とに交はるにあり、拠典に頼らずして独創の見を促すにあり、高潔なる主義を慕ふもの、儼然たる独立を愛するもの、倹を好むもの、峻を悦ぶものは来て此校に学ぶもの甚だ多し

アマースト大学は、札幌農学校の教頭だったクラークの出身校でもあった。が、鑑三は日本にいた時、クラークとは会っていない。クラークはすでに述べたように、札幌農学校の一期生に直接大きな影響を与え、帰国した。一期生を通してのクラークの感化は、鑑三ら二期生にも及び、「イエスを信ずる者の契約」には、鑑三も署名していた。彼が曲がりなりにも信仰を得たのは、クラークのお陰であった。鑑三がアマースト大学に入るのは、神の摂理であったかのようだ。

内村鑑三がアマーストに着いたのは、一八八五（明治一八）年九月七日であった。彼は「日本製の無意気なる洋服を纏とひ」、「ギボンの羅馬史五冊を両手に分握し、」[21] アマーストの町に降り立つ。学長のシーリー（Julius Hawley seelye）は、一八二四年生まれで、当時六十一歳。ドイツのハレー大学に学んだオランダ改革派（Dutuh Reformed Church）の牧師でもあった。シーリーに鑑三がはじめて会うのは、翌九月八日のことである。シーリーとの初対面の様子を、鑑三は「流竄録」に以下のように記す。[22]

予は応接間に導かれたり、暫くにして一紳士の入り来るあり、彼を見挙ぐれば齢已に耳順に近き老君子、躯幹大なるも別に威光あるにもなく、鼻高くして碧眼の一対深く眼腔内に潜むあり、眼光人を射るにあらずして眼球は推察涙の中に浸され、予は一見して彼は学者にあらずして人類の友なる事を悟れり、彼の温暖なる握手は言ふべからざるの真情を漂流の異邦人に伝へ、瞬間にして予は一種異様の安逸を感じ、予をして彼を師と仰がんよりは友として交はらんとするの念を起さしめたり、彼は凡て柔和にして凡て謙遜なりき、基督教的の君子とは予は此時始めて肉眼を以て見るを得たり、後曾て聞けり、我国の文部官某始めて此人に会し、後人に告げて曰く、

シーリー氏に会するは厳冬去て後に春風に会する感ありと、然り穏和は彼の特性と称せざるべからず、彼の頭脳は大なりと雖ども彼の心臓の高且つ大なるに及ばず、彼に一面するは百巻の基督教証拠論を読むに優りて功験あり。

シーリーとの初対面の感動は、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』にも描かれている。シーリーが内村鑑三にとっていかに劇的人物であったかを知るために、ここも読み慣れた山本泰次郎・内村美代子訳で紹介したい。

古びてよごれた服をまとったみじめな姿で、わずか銀貨七ドルをポケットに、旅行カバンにはギボンの『ローマ衰亡史』五巻を入れたのみで、私は大学町（カレッジ・タウン）に入り、やがて総理邸の玄関に立った。ある友人が、あらかじめ私の名前を紹介しておいてくれたので、彼は、若い野蛮人がたずねて行くことをすでに知っていた。私は応接間に通され、そこで、総理の知力とプラトン流の尊厳とによって圧倒される運命を待った。シーッ！ 彼が来る！ 彼のきよらかな面前に立ち得るよう、なんじの霊魂を準備せよ！彼は直ちになんじの心を見抜き、なんじの何者なるかを見破り、なんじを彼の弟子とすることを拒むかも知れない。ドアが開いた。そして見よ、その柔和さを！ 大きな、りっぱな体格、獅子を思わせるような雙の眼に光る涙、並みはずれて強く暖かい握手、もの静かな歓迎と同情の言葉。――ああ、この姿、この心、これは彼に会う前にひそかにわが心にえがいたものではない。私はたちまち、ある特別な安心感をおぼえた。そこで、彼が心から喜んでさし出す援助の手をわが身にまかせることを約して、彼のもとを辞したのである。そのとき以後、私のキリスト教は全く新しい方向をたどりはじめた。

右の文章中の「ある友人」とは、言うまでもなく鑑三にアマースト入学を勧めた新島襄である。新島は教育者の一面をもったキリスト者であった。彼は有能な後輩内村鑑三の未来を慮り、シーリーという人格者が総長を務めるアマースト大学を鑑三に紹介し、はるばる日本からよろしく頼むとの手紙をシーリーに出していたのである。

新島の手を尽くした鑑三への尽力について小原信（おはらしん）は、「鑑三の自叙伝である『余は如何にして』では、シーリーとの出会いを、新島襄ぬきにかっこよく印象的に書いているが、このように劇的な対面、慈愛に充ちたシーリー先生のまなざしを、到着早々から受けられたという幸運は、おそらく新島の礼をつくした紹介状があらかじめシーリーのもとに届いていたからこそ可能になった光景であった」[23]と言う。小原は「新島襄ぬきに」というが、実際には「ある友人」として鑑三は記していた。だからこそ、小原の言うように「新島の礼をつくした紹介状」の効果が、この「劇的な対面」には用意されていたのである。

鑑三はシーリーの名を日本にいた頃から知っていた。彼はシーリーの進化論に関する考えと日本の教育に関する意見とを読んでおり、その卓見に尊敬の念を抱いていたのである。鑑三は後年「流竄録」に「此人に会し此人の薫陶に与（あず）からんと欲するの念は、余が未だ石狩の支流に釣を垂れし時に起りし余の願望なりき」と書いている。つまり彼は渡米以前からシーリーに私淑していたことになる。

なお、この日（九月八日）鑑三は、クラークにも会っている。この年九月十日付、太田稲造宛鑑三書簡（英文）に、そのことが記されている。

四　宗教的回心

一八八五（明治一八）年九月十日、内村鑑三はアマースト大学の三年に編入、選科生として学び始める。二年間の授業料免除、寄宿舎無料貸与という破格の待遇での入学であった。アマースト大学での生活は、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』や「流竄録」に詳しい。鑑三の言う「ニュー・イングランドの学校生活（カレッジ・ライフ）」は、楽しく、意義あるものだった。

しばらく学びの生活から離れ、要介護児童の世話に明け暮れしていただけに、アマーストの学校生活は、新鮮で、心が躍った。けれども、彼には七ヶ月の、苦難に満ちたエルウィンでの生活が必要だったのだ。彼がもしもストレートにアマースト大学に入ったのだったら、以下に示すような感動はなかったのではないだろうか。

教授たちは「好もしい人ばかり」で、ドイツ語の教授は、「今まで見たこともないほど陽気な人」で、ゲーテの『ファウスト』を読み、歴史学の教授は、「ほとんど宗教には触れなかったが、私にとっては、それはほんとうの神学課程」で、聖書注釈学の教授は、鑑三一人の受講生のために、何かと便宜をはかってくれ、二人して規則正しく討論研究を続けたという。これら熱心でユニークな教授たちにも優って、彼を感化し、変化させたのは、「尊敬する総理その人であった」と鑑三は言う。しばらく鑑三のことばを、例の如く『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』から引用する。

私はこの尊敬すべき人を一目見たさに、一度として礼拝を「さぼら」なかった。彼は神を信じ、聖書を信じ、また、あらゆることをなしとげる祈りの力を信じていた。この聖い人が祈っている間にラテン語の復習をしていた、あの考えなしの連中は、天国へ行ったとき、自分たちの行為を悔いるにちがいない。私としては、彼のすみきった、響きわたる声を聞くだけで、その日の戦いに充分な備えをすることができた。神はわれらの父にいましたまい、われらが神を愛する以上の熱意をもってわれらを愛したもうこと、神の恵みは宇宙に満ち満ちているから、われらはわれらの心を開くだけで、神の満ちあふれる恵みに「おどり入って」いただくことができること、神のほかには誰一人としてわれらをきよめ得るものはないのに、われらがみずからきよくなろうと努力することが、すでに誤りであること、真に自己を愛する者は、まず第一に自己を憎み自己を他人に与えねばならぬから、自己主義は実は自己嫌悪であること、等、等、――信仰にあつい総理は、これらの貴重な教訓を、その言葉や行為で私に教えてくれた。実を言うと、この人に接してから、私を圧していたサタンの力はゆるみはじめたのである。私の原罪と派生罪とは徐々に追い払われて行った。学校生活二年ののち、（私は第三年級にはいったので）、私は自分が天国への道をたどりつつあることを発見した。それは、私がつまずかなくなったからではない。（私は今でも絶えずつまずくので）。主が恵み深くましますこと、また、神がわが罪を彼の聖子（みこ）によって消し去りたもうがゆえに、その聖子にたよる私は、永遠の愛から離れることはないことを今や知るに至ったからである。この

後の日記は、それが事実であったことを示している。

シーリーは、前述のように一八二四年生まれであり、一八六一年生まれの鑑三とは、三十七歳ほどの年齢差があった。親子ほどの年齢差と言い換えてもよいだろう。それは文化系の高等教育にとっては、ほぼ理想的年齢差としてよい。鑑三はシーリーに、偉丈夫でありながら「獅子を思わせるような雙の眼に光る涙」と柔和な物腰を初対面で見出し、感動していたが、その講義に接し、ますます尊敬の念を抱くこととなる。

彼はシーリーの〈風貌と物腰〉に圧倒される想いを抱く。それは後年、彼が若き正宗白鳥や志賀直哉や矢内原忠雄に与えた〈風貌と物腰〉にどこか似ている。シーリーを尊敬するあまり、その挙措まで乗り移ったかのようである。例を、矢内原忠雄の「日記」に見よう。一九一一（明治四四）年十二月二十三日から引用する。娘の病に関しての鑑三の態度が記されたところである。

わが祈りは「み心に召すならば」にあらずして「是非」といふ事になる也、而してわが信仰あらば必ずやこの祈りの聞かるべきを信ず。（先生巨躯を伸ばし背伸し右手を高くあげて天井を指す。その間二三寸、曰く）丁度かくの如く、も一息きといふ処にて信仰たらざるが如き感す。余の今最も諸君に求むるは、皆が信仰は不完全ならん、そは致し方なしとしても全人格を掲げてわがために祈りくれゝばその united force を以てわが祈りは聞かれ手は天井にとどき、病もいゆべし、――かくの如くにして、遂に一週一度まじめなる祈り会をせんとの Plan を提出せられ、明日は講義は休みなれども、真に熱心ある人は来て祈祷会をして貰ひたし。但し、すこしにても自分が進みて力をそへんとの熱心あるを要す。自分もいつてそのおかげにあづからうなどと却つて重荷になる如き人は来てもらひたくないと。――

内村鑑三という偉大な信仰者の風貌と信仰が、伝わってくるかのようだ。わたしは前著『評伝矢内原忠雄』で、この箇所に関して、以下のように書いた。〈人は「み心にかなふならばこの病をいやさしめ給へ」と祈るが、矢内原忠雄の師内村鑑三は、「祈りが聞かるゝことを確信するにあらずんば信仰なき也」と言う。また「わが祈りは「み心に召すならば」にあらずして「是非」といふ事になる也、而してわが信仰あらば必ずやこの祈りの聞かるべきを信ず」とも言い、「（先生巨躯を伸ばし背伸し右手を高くあげて天井を指す。その間二三寸、曰く）丁度かくの如く、も一息きといふ処にて信仰たらざるが如き感す」のところなど、師の風貌、挙措を捉えて圧巻である。これを正宗白鳥風に言うならば、「多感多情の内村が天を仰いで哭泣（こっきゅう）[24]す」と言ったところか〉と。

若き日のアマースト大学総長シーリーの影響は、以後内村鑑三の生涯に及ぶ。鑑三の真の宗教的回心は、シーリーの影響下なされる。Very important day in my life ではじまる、一八八六（明治一九）年三月八日の英文日記は、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』にも引用されている。ここでも山本泰次郎・内村美代子訳で、その冒頭部分を示そう。

三月八日　わが生涯におけるきわめて重大な日。キリストの罪のゆるしの力が、今日ほどはっきりと啓示されたことはなかった。今日までわが心を悩ませていたあらゆる疑問の解決は、神の子の十字架の上にある。キリストはわが負債をことごとく支払いたもうて、われを、始祖の堕落以前の清浄と純潔につれもどしたもう。今やわれは神の子であり、わが義務はイエスを信ずることである。彼のゆえに、神はわが望むものをすべて与えたもうであろう。神はわれを神の栄光のために用いて、ついに天国においてわれを救いたもうであろう。

鑑三は「故国で洗礼を受けてからほぼ十年の後に、私はニューイングランドでほんとうの回心を得た」（『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』）と言うように、「わしのような眼と、ライオンのような顔と、羊のような心とを持った」（同前）アマースト大学総長シーリーの影響で、真の神と出会ったのであった。鑑三は「我が信仰の表白」[25]で、「若し余をして余の信仰上に一大影響を与へし人を指名せむとならば余は第一にアマルスト大学教頭シーリー氏を指名せざるを得ず　余は氏の人物風采に於て余の理想的の基督教の顕出を見たり　氏の赤子の如き信仰と柔和なることは余をして品格は人間価値に関して智識の上に位するものなることを知らしめたり」と書く。

鑑三の回心に、決定的感化をもたらしたシーリーの教えとは何か。彼は後年シーリーの語ったということば、「内村、君は君の衷をのみ見るから可ない。君は君の外を見なければいけない。何故己に省みる事を止めて十字架の上に君の罪を購ひ給いしイエスを仰ぎ瞻ないのか。君の為す所は、小児が植木を鉢に植えてその成長を確定めんと欲して毎日その根を抜いて見ると同然である。何故に之を神と日光とに委ね奉り、安心して君の成長を待たぬのか」[26]を持ち出す。鑑三はここに信仰とは、人間の努力や善行ではなく、へりくだって、いっさいを神の子イエス・キリストに委ねることにあることを理解するのであった。

信仰とはなにか、再び言うが、鑑三はその答えをシーリーから学んだのである。鑑三のこの確信に関して、亀井俊介は「つまり、自己を謙虚にすることが、逆に自己に自信を与えたのである。外から見ると、これまた内村のいちじるしい矛盾であるが、内村のこれ以後の行き方のエネルギーは、まさにこの自信から生まれた部分が大きいように思われる」[27]と言う。亀井は自らキリスト信徒ではないと公言するが、キリスト教の真実を巧みに捉えた発言である。

鑑三がシーリーから学んだことは多い。その中には学問に対する態度もあった。鑑三のシーリー回想には、次のような学問と信仰に伴う重要なシーリーの教えも含まれる。

私はシイリー先生より信仰を学び、併せて信仰に伴ふ学問を学んだ。先生は私に凡ての知識の源としての主イエスキリストを紹介して呉れた。先生に依りて私は安心して信仰と共に学問を続ける事が出来た。知識の伴はざる信仰の甚だ危き事を先生は私に教へて呉れた。先生は私が伝道の熱心に駆られて、充分の準備を為すことなくして伝道を開始せんことを虞れた。「学問はいくら有つても足りぬ。沢山に学び置けよ、ユックリ」と先生は度々私に忠告して呉れた。先生自身が独逸仕上げの深い

学者であつた。而かも先生の学問は悉くキリストの祭壇に捧げられた。故に潔められたる学問であつて、深い丈け美くしくあつた。[28]

鑑三は自然科学方面の学問は断念することとなるが、聖書研究という学問は、終生のものとなっていく。彼の聖書研究に寄せる学問的態度は、これまたシーリー仕込みのものであり、その打ち込みようは尋常でない。

一八八六（明治一九）年三月九日、日本の札幌農学校教頭を務め、短期間に多くの有能な人材を育てたW・S・クラークが逝去した。鑑三はすぐさま筆を執り、The Missionary Work of William S. Clark を書く。この一文は同年四月二十二日刊行の雑誌 *The Christian Union* に載った。ちなみに鑑三は、その生涯において、いくつもの追悼文を書いているが、心にしみるものが多い。これもその一つであった。

同年六月二十九日、アマースト大学で卒業式が行われた。前述のように内村鑑三は、アマースト大学に三年編入の選科生として入学した。けれども大学当局は、シーリーの配慮もあって卒業に際して選科生でなく、正規生（Bachelor of Science）の扱いをしている。これは、アメリカでの神学校進学を考えてのことでもあったようだ。

アマースト大学在学中、内村鑑三は聖書研究を怠らなかった。『旧約聖書』の「イザヤ書」「エレミヤ記（エレミヤ書）」「ヨブ記」、そして『新約聖書』の「ヨハネ黙示録」を熱心に読む。註解書を参照に、彼は聖書を直観を尊びながらも、当時の先進的とされた註解書にも学び、せっせと読んだ。後年の厖大な内村鑑三聖書研究書執筆の基礎は、ここに築かれる。鑑三はアメリカの神学校でさらに勉強し、日本に帰ったらキリストの福音を伝える牧師になろうと考えていたこともあって、真剣に聖書の研究に当たったのである。当時彼が愛用した聖書に墓碑銘のためにと書いた以下のような四行の英文のことばは、すでに第一章で紹介している。今一度示すなら以下のようなものであった。いわゆる二つのJ（Japan, Jesus Christ）がここに読み取れる。

I for Japan
Japan for the World
The World for Christ
And All for God.

この四行のフレーズには、アマースト大学時代の鑑三の決意が、込められているかのようだ。彼は日本に帰ったら、日本人伝道に従おうと考えていたのである。そのための神学校行きが、ここに浮上する。

同年九月十三日、内村鑑三はアマーストの地を離れ、新たに籍を置くことになった神学校のあるハートフォードへ行く。シーリーの勧めであった。この夏休みには、神学校入学に備えて、ヘブライ語とギリシャ語の勉強をしたようだ。

ハートフォード神学校は、会衆派（組合教会）として出発した神学校ながら、教派色の薄い神学校であった。鑑三にはふさわしい神学校とシーリーは考えたようだ。この神学校には、後年早稲田大学の教授となり、野球部の創設にかかわった安部磯雄が、少し遅れて

入学している。安部には快適な神学校生活だったらしいが、鑑三には向かない学校であった。この学校のカリキュラムは、将来牧師を目指す者を対象とした形式的・実務的訓練が主であり、霊的訓練や厳しい聖書研究の授業は見出せなかったからだ。

鑑三はすぐに失望し、不眠症を患い、健康も極度に悪化する。彼はもはやアメリカには学ぶものはないとして、神学校は半年で退学し、帰国を決意するのであった。鑑三はもともと「職業的牧師」を嫌っていた。武士の家に生まれた彼には誇りがあり、「人のなさけにすがるよりは剣にたよる方がはるかに名誉」と信じる教育を幼い頃から受けてきた。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』には、彼がアメリカでシーリーをはじめとするすぐれた牧師であり、神学者でもあった人々に出会うことで、そうした偏見から抜け出て、神学校入学を決意した次第が語られる。その上で神学校での研究が続けられなくなる理由が、説得力豊かに展開される。彼はきびしいことばを、神学校の制度に投げかけることになる。

彼は言う。「りっぱな合唱隊、たのしい教会社交、若い婦人たちのバザー、無料昼食会、日曜学校遠足会、――すべてこうしたことが、今では霊魂を支える重要な手段と考えられており、「教会神学」の大部分は、そのような事務に占められているかのように見える」と。こうした鑑三の批判は、とかく教勢（礼拝の出席者数）のみに目を奪われ、本質を見逃しがちの二十一世紀のキリスト教伝道を考える上でも省みられてよいものがある。

かくて、内村鑑三は三年半過ごしたアメリカ生活をここに終え、ハートフォード神学校を退学、帰国の途に着く。ニューヨーク港からパナマに向けて出航したのは、一八八八（明治二一）年三月十日のことであった。アメリカ西海岸のサンフランシスコをパーシャ号で出港するのは、四月二十一日であり、彼は帰国に際して、鉄道を用いず、南回りの船旅で大回りをして東海岸に出たのである。サンフランシスコからは、カナダのバンクーバーを経ての旅となった。それには帰国に際して見聞を広めるという意味もあったのであろう。

注

（1）内村鑑三『余はいかにしてキリスト信徒となりしか　わが日記より』山本泰次郎・内村美代子訳『明治文学全集39 内村鑑三集』筑摩書房、一九六七年一二月二五日。六〇ページ

（2）鈴木範久『内村鑑三日録１ 1861～1888 青年の旅』教文館、一九九八年二月一〇日、一一四、一一八ページ

（3）注２に同じ。一四七ページ

（4）注２に同じ。一四七ページ

（5）クララ・ホイットニー・一又民子・高野フミ・岩原明子・小林ひろみ訳『勝海舟の嫁 クララの明治日記』下巻、中央公論社（中公文庫）、一九九六年六月一八日。五一二～五一五ページ。初版は中央公論社、一九七六年五月二〇日

（6）注２に同じ。一六〇ページ

（7）注２に同じ。一六九～一七〇ページ

（8）鳥井足『評伝・内村鑑三』あさを社、一九七九年三月一日。八五～八六ページ

（9）鈴木範久『内村鑑三』岩波書店（岩波新書）、一九八四年一二月二〇日。二六ページ

（10）小原信『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』ＰＨＰ研究所（文

庫版)、一九九七年六月一六日。一五一ページ

(11) 内村鑑三「古今集擅評」『東京独立雑誌』11号、一八九八・一〇・二五、『内村鑑三全集6』収録、一七四〜一七八ページ

(12) 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年二月二〇日

(13) 内村鑑三「ウィスター、モリス氏に関する余の回顧」『基督教新聞』四一三号、一八九一年六月二六日。『内村鑑三全集1』収録、一九六〜一九八ページ

(14) 太田稲造宛、一八八五年一月一九日付内村鑑三書簡(英文)、『内村鑑三全集36』、一二九〜一三一ページ

(15) 注2に同じ。一八九〜一九三ページ

(16) 内村鑑三 The Missionary work of William S.Clark,Ph.D.,LLD *The Christian Unoon*『内村鑑三全集1』収録、一三六〜一四一ページ

(17) 小原 信『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』(PHP文庫)PHP研究所、一九九七年六月一六日。一二五ページ

(18) 『新島襄全集6』英文書簡編、同朋社出版、一九八五年十一月五日、『新島襄全集7』英文資料編、同朋社出版、一九九六年十一月一日

(19) 内村鑑三「余の旧き聖書より」『新希望』71号、『内村鑑三全集14』収録、三二〜三七ページ

(20) 内村鑑三「流竄録」『国民之友』二三三〜二五一号、一八九四年八月二三〜一八九五年四月二三日。のち『内村鑑三全集3』収録、引用部分は、七二〜七三ページ

(21) 注20に同じ。七四ページ

(22) 注20に同じ。七四ページ

(23) 注17に同じ。一八〇ページ

(24) 正宗白鳥「内村鑑三―如何に生くべきか―」『社会』一九四九年四月一日〜五月一日、のち『正宗白鳥全集』第二五巻、福武書店収録。一九八四年六月三〇日。二〇九〜二六一ページ

(25) 内村鑑三「我が信仰の表白」『六合雑誌』一三一号、一八九一年一一月一五日。のち『内村鑑三全集1』収録。二一〇ページ

(26) 内村鑑三「クリスマス夜話=私の信仰の先生」『聖書の研究』三〇五号、一九二五年一二月二〇日、のち『内村鑑三全集29』収録。三四三ページ

(27) 亀井俊介『内村鑑三 明治精神の道標』(中公新書)中央公論社、一九七七年一月二五日。五四ページ

(28) 注25に同じ。三四四ページ

受領日 二〇一八年八月一五日
受理日 二〇一八年一一月七日